

弥陀の本願信ずべし  
本願信ずるひとはみな  
摂取不捨の利益にて  
無上覚をばさとるなり

この和讃を、ゆめにおおせをかぶりて、  
うれしさにかきつけまいらせたるなり

(『正像末和讃』、聖典500頁・1059頁)

## おおせをかぶりて

第13組 智恵光寺住職

松澤 正樹

Text by Masaki Matsuzawa

### 夢告和讃

この和讃は、親鸞聖人85歳の康元2年(1257)2月9日夜に、夢告として感得されたものである。この8か月前の建長8年5月、聖人は関東教団を攪乱した長男善鸞を義絶するという、聖人にとってたいへん厳しく悲しい出来事に遭遇されている。そのような重く悲痛な状況の中で聞かれたのがこの夢告であった。

この和讃には、草稿本ではこのあとに「この和讃を、ゆめにおおせをかぶりて、うれしさにかきつけまいらせたるなり」の言葉が注記のようにして書かれてあるから、夢の中でこの和讃(教え)をいただき、そのあまりのうれしさに書きつけたということである。

関東の門弟たちに送った聖人のお手紙からは、当時の教団の混乱に対する聖人自身の動揺が感じられる。聖人自身もまた混乱と迷いの中にあって進むべき道がまったく見えなかった。しかし、そのような暗闇の中にあったからこそ、法然上人が夢告となって道を示されたことに対して、「うれしさ」という直接的な感情を吐露されたのであろう。

この2月9日は、「仲春上旬の候」(『教行信証』後序・聖典398頁)に当たる。『明月記』建永2年2月9日の条に「近日、只だ一向専修の沙汰、搦め取られ拷問せられると云々。筆端の及ぶ所に非ず」とあるところから、2月9日は死罪にあった住蓮・安楽たちの命日から間もない日であった。「法難」を想起せずにおれないこの時期にこのような夢告を受けたことは、晩年の聖人にとって自らの仏道を改めて問い直す機縁になったに違いない。「法難」はけっして過去

の災難ではなかったと。

### 教えに立ち還る

この夢告について宮城顛師は、「義絶を通してあらためて歩みの始源に立ち還られた宗祖の確信であった」（『宗祖聖人親鸞—生涯とその教え 下』）と言われている。ここで「歩みの始源」と言われるのは、和讃の意味するところ、つまり念仏往生・念仏成仏の教え、本願そのものをいうのであろう。

念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。（中略）親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。（『歎異抄』第二章、聖典626・627頁）

聖人は、門弟が懐いたまだ聞いたことのない新しい何かへの期待に対して、「おおきなるあやまりなり」と真っ向から否定し、「ただ念仏」という「よきひとのおおせをかぶりて信ずる」だけである、と言い切られた。

ここに夢告を聞いた聖人が重なる。門弟に対して教えをたれておられるかのような聖人は、実は目の前の門弟たちとともに法然上人が夢にまで出てこられて示された念仏往生の教えを自らかぶっておられたのである。聖人ご自身が教えに立ち還り、本願という如来の大悲を感じておられた姿ではないか。

### 西方指南抄

善鸞義絶後、聖人は著作・編集・書写に精力的に取り組んでおられる。『親鸞聖人行実』（東本願寺刊）の「略年表」を見るだけでも目を見張るものがあるが、その中でも注目されるのは、師法然上人の最初の言行録となる『西方指南抄』6冊の編集である。本書は、師の説法の聞き書きや書簡などから成り、善鸞義絶より4か月半後の康元元年10月から、夢告を受ける1か月前の翌2年1月までに編集し書写、校了を遂げている。

この短期間の作業に、1月25日の法然上人御正忌の仏前に捧げるという意図を見る見方（『定本親鸞聖人全集』第五巻解説）もあるが、同時に、聖人が義絶後の悲しみと迷いの中で、師法然上人の教えの前にあらためて座り直し、懸命にしかし静かによきひとのおおせをかぶっておられたに違いない。夢告は、そんな聖人の聞法と思索の中でおこった「うれしさ」であり救いであった、と言えるのではないだろうか。